



静脩

1995年6月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 32, No.1

京都大学附属図書館の現状

附属図書館長

長 尾 真

要旨

- ・ 学生用の図書の充実と情報活用に関する教育
- ・ 60余りの部局図書館・室とのスムーズな協力
- ・ 図書館のよりよい情報化
- ・ 開かれた図書館への努力

京都大学には附属図書館のほかに60余りの部局図書館・図書室があり、これらが有機的に連携して京都大学図書館を構成しています。その中で附属図書館の現状と解決すべき課題などについて述べ、皆様のご理解とご協力をお願い致します。

1 転換期における大学図書館の使命

情報技術の発展によって図書館は大きな転換期に来ております。図書館は人類の過去の知識の宝庫であるとともに、最新の情報をも提供できる所であればなりません。「知識は万人のものである」と言われているように、図書館はあらゆる種類の知識・情報の提供のためにできるかぎりの努力をすることが要請されており、その期待に答えねばならないと存じます。

大学図書館はまず、学生のための学習図書館でなければなりません。学習のための基本図書を常に充実し、読書・学習のための十分な席を提供することが必要です。また図書館の活用法、

学術情報の利用法についての知識を学生に与えることが必要です。日本の大学ではこういったことについての講義がなく、学生は報告書などを書く時にどのようにして資料や参考図書を見つけ出し、活用するかについての訓練を受けていないのは大きな問題です。情報図書館学、情報探索学といった科目を設け、学生全員にその能力を持たせることは、語学教育、情報処理教育とともに必須のことです。

大学図書館はまた、研究者のための図書館でなければなりません。研究者が必要とする図書・資料・情報を必要な時にすぐ提供できることが必要で、自分の図書館にない場合には、どこにそれがあるかを探し、それを貸借したり、コピーを入手するということをしなければなりません。限られた予算の中では必要な図書・雑誌を全て1つの図書館で購入することは不可能ですから、多くの大学が相互に協力しあい、重複した雑誌・図書の購入を避け、図書館間の相互貸借、コピーサービスなどを迅速に行う体制を作らねばなりません。

学問分野によっては、図書や資料はまさに精密実験装置にあたる大切なものであり、それぞれの研究者に所属するものという意識が濃厚です。しかし今日、多くの入手しにくいデータや実験装置は共有という形で国際的にも解放されており、必要な人は使うことができるようにな

って来ております。このようにしてできるだけフェアな条件のもとに切磋琢磨が行われ、これが学問研究の発展に大きく貢献しております。

図書館はそういった意味からも開かれたものであるべきであり、その方向の努力をすることは図書館員として持つべき当然の倫理と考えます。その第一歩としてOPAC(Online Public Access Catalog)と呼ばれている図書カードの電子化、データベース化が行われております。こうして学内はもとより全国の研究者がそれぞれに必要とする図書・資料の所在が分かるようにし、要求に応じて貸与したり、コピーサービスが行われております。British Libraryは何年も前からこれを国際的なレベルで実行に移し、世界の図書館界に大きなインパクトを与えました。京都大学の研究者もこのサービスの恩恵を受けている人は多いのです。

2 京都大学附属図書館の実態

京都大学図書館は全体として約530万冊の図書を持ち、2万7千種の雑誌を所蔵しております。そのうち中央館である附属図書館は図書75万冊をもっておりますが、図書購入費は年間にたったの3千冊相当であり、寄贈書等を入れて年間約6千冊の受け入れというまことに寒々とした状況にあります。また、工学部化学系の雑誌、理工学系外国雑誌センターの雑誌をのぞけば、附属図書館固有の購入雑誌はたったの212種類であります。京都大学全体で何千科目か開講されている講義に関連した学生用の学習図書、参考図書類の充実はずいとも行わねばならないものですが、全く不十分といわざるをえません。こういった危機的状況に対して平成6年度は総長特別経費の一部を学生用図書購入費として配分していただき平成6年度の購入図書は4,600冊となりました。しかし、今日国内で出版されている書籍は年間約4万点といわれており、学術論文の数も年々増加の一途をたどっています。それにもかかわらず図書館予算はここ数年間ほとんど増えていないために、図書・雑誌の単価の上昇に反比例して購入図書の数が減って来てい

るという深刻な事態となって来ているのです。

附属図書館には現在870席の座席があつて読書・学習のために利用されていますが、1日当たり平均2,500人の入館者のためには不十分であります。開館時間は平日9時から21時までで、土曜日にも開館して来ましたが、関係各部門の方々のご理解とご協力によって平成7年5月からは日曜日にも開館することが出来るようになり大変うれしく思っております。これまで土曜日は平均1千人の入館者がありましたので、日曜日の利用者も相当な数となると思われます。

平成4年4月から学術情報センターによる図書館相互協力サービスが本学でも実施され、何がどこにあるかが全国的に分かるようになりましたので、全国の大学相互間での図書の相互利用、コピーサービスが急増しております。附属図書館における平成3年度の文献複写の受付件数は1万件でしたが、平成5年度には1万5千件となり、年率20%程度の急成長であります。コピー枚数は平成5年度には13万枚となりました。また本学研究者の学外雑誌の利用は平成元年から平成5年の間に2倍(平成5年度8,091件)にも増えております。このようなサービスは利用者にとっては非常に便利なものでありますが、年々人員削減をされている図書館側にとっては大変な負担となる問題であります。特に、学外からの依頼は多くが附属図書館に来ますが、図書そのものは部局図書館にあるという場合が大変です。部局図書館で直接外部からの依頼を受けて対処していただいているところも多いのですが、そうでない部局図書館もまた多く、その場合には附属図書館から部局図書館に本を借りに行つて、コピーした後また返本に行かねばならないという手間がかかるわけであります。こういった仕事は1日平均して数十件あります。

このような学内・学外からの図書・資料の相互利用の依頼はますます増えて行きますが、学内の全ての図書館・図書室相互間、さらには他大学の図書館ともお互いに手を握りあつて学生や研究者の要求に答えて行くことが必要です。こうした図書館側の努力が学術の発展につながってゆくことですから、そのサービスレベルを

常に向上させるようにしなければなりません。ところがOPACによって検索できる図書は本学の場合、まだ45万点に過ぎず、あと315万点の図書カードをコンピュータに入力しなければなりません。部局図書館（室）でもこの図書カードの遡及入力に努力をしていただいておりますが、前途道遠しの感をまぬがれません。しかしこれを完成しなければ利用者にほんとうに良いサービスをすることはできないのですから、10年かかってカード全部の入力を行う必要があると考えております。

図書館が参考業務といって、利用者の質問に対して答えたり助言したりするサービスをしていることを知っている人は少ないのではないのでしょうか。大いに利用していただきたいのです。そうはいっても参考業務も年々増加して来ております。特に文献調査の依頼は平成6年度には約1万1千件に達しており、毎年20%程度の増加となっております。このうち学外からのものが約半数あります。参考調査業務は質問によっては1件の処理に非常に時間のかかるものがありますので、1日平均50件といっても大変な人手をとる仕事なのです。しかしこの業務が図書館司書にとって最もやりがいのある仕事でありますので、サービスの質を向上すべく常に努力をしているわけであります。

館長紹介

昭和11年10月4日
生まれ・工学部教授
京都大学工学博士
電気通信工学講座
言語メディア工学
主な著書…
「電子図書館」岩波
1994、「人工知能と
人間」岩波 1992、
「岩波情報科学辞典」
岩波 1990、「知識と
推論」岩波 1988、
ほか多数



3 将来へ向けての努力

京都大学図書館としてやらなければならないことは多くあります。学生用の図書を充実すること、図書カードのコンピュータへの遡及入力をする、相互貸借のシステムを効率の良いものとするなどとの必要性は既に述べましたが、これら以外にも、学生に渡す図書館利用証の問題もあります。図書館利用証は附属図書館と総合人間学部で共通に使えるものと、各学部各学科の図書館・図書室で使うものとが違って、発行する側も面倒ですが、学生は常に学生証と合わせて3つのカードを携帯しなければならないというわけです。他学部・他学科の図書を利用するには特別の利用証を所属する学部・学科の図書室から発行してもらわねばならないという厄介なこともあります。附属図書館固有の問題は他にも沢山ありますが、これはまたいずれ述べさせていただくことに致しましょう。

限られた数の図書館職員で年々増大する情報量に対処し、またより急激な比率で増大する図書館の各種利用要求に答えるためには、本の自動貸出機の導入をはじめとし、出来るだけ強力で使いやすく仕事の効率の上がる最新の図書館情報システムに現在のシステムを入れ換える必要があります。そしてコンピュータ・ネットワークを通じて世界中の図書館、データベースから必要な情報を入手できるようにしなければなりません。また京都大学が持っている情報を世界に向かって発信していく発信型の図書館機能も持つようにする必要があります。

さらにこれから急速に発展して行くと考えられている電子出版にも対応できる電子図書館の準備もして行かねばなりません。取り組むべき課題は多いのです。

以上述べて来ましたが多くの問題は単に附属図書館固有の問題ではなく、京都大学の60余りの図書館群全体の問題であり、それは即ち京都大学の研究者・学生・職員全員の問題でもあるわけです。そこでこれらの問題を詳しく検討し、京都大学附属図書館の将来像を出来るだけ明確

化するために図書館商議会の中に専門委員会を設置していただき、さっそく具体的な検討に入っております。いずれにしても、この問題は京都大学の全ての部局の合意と協力がなければ解決できないものであります。

京都大学附属図書館の現状をご理解いただく

とともに、ぜひとも積極的なご意見をいただき、理想的な図書館に少しでも近づいて行くべく努力致す所存でありますので、ご支援、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

附属図書館長就任にあたって。

平成 7 年 5 月

土・日のサービス拡大について

附属図書館では平成 7 年度より、土曜日のサービス拡大と日曜開館を開始しました。学内外からの要望にこたえるべく検討をすすめていたもので、職員出勤による土曜日のサービス拡大は 4 月より、日曜開館は 5 月より実施しています。

アナウンスの期間も少ないままの実施でしたが、土曜日の書庫内検索や利用証の受付交付も好評で、卒業生や学外の方からの問い合わせや来館も増加しています。(来館実績は右のとおり)
 なお、夏季休業中の土・日および祝日は、休館となります。定例月末休館日はその都度、お知らせ致します。

(土曜日のサービス内容)

- ①地下書庫入庫検索・地下書庫内資料の貸出(特殊資料を除く)
- ②OPAC/TSS の検索

- ③図書館利用証の申請受付交付(昼休みは休止)
- ④学外者の受付 (")
- ⑤クイックレファレンス (")

(日曜日のサービス内容)

- ①開架図書・雑誌の貸出・閲覧のみ(特殊資料は除く)
- ②校費カードによるコピーサービスは可

土 曜 日		日 曜 日	
4 月 8 日	464人	_____	
15日	887人		
22日	912人		
5 月 6 日	1,054	5 月 7 日	505人
13日	1,299	14日	384
20日	1,176	21日	352
27日	1,136	28日	508

<開 館 ・ 貸 出 ・ 入 庫 時 間>

	開館時間	貸出・返却時間	地下書庫の検索
通 常			
月～金	9：00～21：00	9：30～19：00	9：00～12：00, 13：00～19：00
土	10：00～17：00	10：30～15：00	10：00～12：00, 13：00～15：00
日	10：00～17：00	10：30～15：00	_____
冬期短縮開館中 (1/6～10)			
月～金	9：00～17：00	9：30～16：00	9：00～12：00, 13：00～16：00
土	10：00～17：00	10：30～15：00	10：00～12：00, 13：00～15：00
日	10：00～17：00	10：30～15：00	_____
夏期短縮開館中 (7/21～8/4, 8/16～9/10)			
月～金	9：00～17：00	9：30～16：00	9：00～12：00, 13：00～16：00
土・日	休館	_____	_____